

りの、しろがねのおけふたつ、おなじひさくして、しろき御かゆ一おけ、あかき御かゆ一をけ、しろがねのたゝいゑやつに、御かゆのあはせいほのよくさしやうじのよくさ、おほきなるぢんのおりびつにさしいれて、こがねのかはらけのおほきなるちひさき、しろがねのはしまたすへて奉り給へり、

〔言經卿記〕慶長八年三月三日庚申、長橋殿へ參、御禮申入了、○中禁中鬪鷄有之、倉部侍大澤彌七郎被參了、冷ヨリ白粥給之、庚申待也、禁中御祝ニ倉部參了、

〔藤原仲文集〕雪のふりたるつとめて、院の御かゆのおろし給て、歌よめとおほせられければ、白雪のふれる朝のしらかゆはいとよくにたる物にぞありける

〔徳用食鏡〕若狭の白粥

若狭の國小濱にては焚かげん功者なれば、若狭流の焚方と云也、扱白粥の焚やうは、竈の賑ひにのぶる如く、米を洗ふに少し前目に、未だ水に白みある位にとぎすこし堅きかゆの水かげんにしてたき、吹あがらば火をほそめ、一二粒あげてつまみ見るに、未だ米のしんあらんかと思ふ頃薪を引つくし、靜に爐も引て、しばらくむらし置、釜よりすぐに茶わんにもりて、其上に葛を醬油にてねりたるあんをかけ、かきませ食すれば至て美味也、尤白粥の中に鹽を入る事なし、米は上白の新米ならば猶味ひよろし、如此して食すれば、別に菜なくても食する事なれば大に徳用也、

割粥

〔老人雜話〕坤太閤秀吉豊臣高野山へ參詣の時、割粥を進めよとのたまふ、暫ありて料理人調て參らす、太閤喜て云、高野山には白無き所也、我が割粥を食んことを知りて持來る、料理人才覺の至也と云、實は持來らず、俄に多人數にて俎の上にてきざみ、割粥となせり、後に咄の次に申ければ、大に怒て云、無くばなしと云て、常の粥を出さんに何の子細かあらん、我力には一粒宛けづりて食